

## 濱一衛先生の思い出：御息女へのインタビュー： 附：周作人より濱一衛に贈られた書4点

中里見，敬  
九州大学

田村，容子  
金城学院大学

中塚，亮  
愛知淑徳大学

<https://hdl.handle.net/2324/1916231>

---

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp.217-240, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



濱一衛先生の思い出  
——御息女へのインタビュー  
附：周作人より濱一衛に贈られた書 4 点

中里見 敬 田村 容子 中塚 亮

九州大学附属図書館濱文庫の中国演劇資料を収集された濱一衛先生（1909～1984）は、1934年6月から1936年6月までの2年間、北京（当時は北平）に留学し、北京大学教授の周作人邸に寄宿した。また1939年8月にも周作人邸を訪れている。昨年公開された「1939年周作人日記」に、

八月九日 晴，下午小雨，热，93°

晚濱君索旧照片及友人书，以平伯诗二、玄同札一贈之，又予以所书《擲鉢诗》一纸。

〔夜，濱君が昔の写真と友人の書を求めるので，兪平伯の詩 2 篇と，錢玄同の書簡 1 篇を贈る。さらに自筆の「擲鉢詩」1 紙も贈る。〕<sup>1</sup>

との記述があったため、ご遺族に伺ったところ、周作人より贈られた書 4 点が保管されていることがわかった。我々3名は現物を確認するために2017年9月3日、御息女の藤本康子様を三重県東員町のご自宅に訪問した。書を見せていただいたあと、藤本康子様および御夫君の藤本知道様より濱先生の経歴やご家庭での様子を伺った。我々の質問に丁寧にお答えいただき、また本稿発表のご許可もいただいたことに深甚の謝意を表したい。

大阪生まれの濱先生が1938年に最初の赴任地、松山高等商業学校へ行かれるときは、漱石の『坊ちゃん』のような心境だったそうだが、松山では熱心に学生を指導され、すっかり馴染まれたとのこと。1949年九州大学教養部に転任して、最初は久留米の第二分校に勤務され、教員がみな一箇所にかたまつて市営住宅に住んでいたとのこと（1955年に福岡市の六本松キャンパスへ統合）。先生の勉強部屋の外で、子どもたちが遊んでいると、康子さん呼んで、「うるさいから、あっちに行って遊んで」と、自分では子どもたちを叱れなかったとのこと。心優しい先生の人柄が偲ばれる。こうしたお話に引き続いて、録音を開始した。

理解を助けるために、あらかじめ濱一衛先生の略年譜を掲げておく。

<sup>1</sup> 「1939年周作人日記」（『中国現代文学研究叢刊』2016年第11期）。この書が贈られた経緯については、中里見敬「新公開の劉承幹と周作人の日記に見える濱一衛：兼ねて濱文庫所蔵『春水』手稿本を論ず」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2016/2017）参照。

1909年 大阪生まれ  
1930年 (旧制) 浪速高等学校卒業  
1933年 京都帝国大学卒業, 中国文学を専攻  
1934年6月 外務省文化事業部第三種補給生として北平に留学, 周作人宅に寄寓する  
1938年 松山高等商業学校着任  
1949年 九州大学教養部着任  
1973年 九州大学教養部定年退官  
1984年 逝去

〔話し手：藤本康子様（濱先生の御息女、以下「藤本」）、藤本知道様（康子様の御夫君）  
聞き手：中里見敬、田村容子、中塚亮〕

藤本： お芝居が好きで、歌舞伎が来たらよく行ってましたね。それとよく現代劇の、山本富士子とか福岡に来てました。そんなときに、母も好きだったから二人で、歌舞伎が来たら100パーセント行ってましたね。

中塚： お芝居だったらなんでもという感じですか？ 現代劇で新しいものも。

藤本： お芝居はなんでも生で観たいって。小さい頃、大阪ではいっぱいお芝居小屋があったんですって。子供の頃からそこに入りびたって観てたって、言っていました。好きだったみたいです。歌舞伎がなにしろ一番好きで、いつの頃からか中国のあれが好きになって、京劇って言うんですか。

中里見： 濱先生のご両親もお芝居が好きだったんですか？ 濱先生が小さいときから連れて行かれていたとか？

藤本： それは聞いていないですけど。貧しい家<sup>うち</sup>だったらしいんですよ。それで母の方がわりと裕福で、判子屋さんだったんですよ、母は。山名っていうのは母の実家なんです。判子屋さんでもあんなの（掛け軸を指して）作っていたのかよくわからないけど。

中里見： 掛け軸に表装したのは山名なのですね？

藤本： それも聞いてないんですよ、全然。だけどよく見たら、山名何とかって書いて、大阪の何々区って書いてあるから、そういうのもやっていたのかな<sup>2</sup>。大きな判子屋さんで、母の方は。それで父はそうやって（表装して）大事にしていたんでしょうね。だからこうやって保存されたんですよ。（掛け軸は、濱先生が周作人から贈られた書を表装

---

<sup>2</sup> 掛け軸の箱に「大阪東区南農人町 山名瑞雲堂製」とある。

したもの)

中里見： 大阪の街の真ん中で生まれ育ったんですか？

藤本： そうみたいです。もとは下級武士、足軽で、岡山から私の祖父、おじいちゃんが来たんですって、岡山に職がないから。侍がなくなったときなんでしょうね。大阪に出て来て、とても器用な人で、大工さんやってたそうです。もう貧しくて大変だったそうですよ。すごく器用でいい大工さんだったんだけど、アルコールに強くて、いつも酔っ払って仕事しないって、おばあちゃんが嘆いていたって、私は知らないけど、父が話してました。腕のいい大工なのにつて、おばあちゃんがいつも悲しんでたって、言っていました。そのために、おばあちゃんが三味線を教えていくらか稼いでいたそうです。それでもうこれからは大学に行かないかんから、あんた大学に行きなさいって、そういうふうにならずとと言われて育ったって (笑)。そう言った。

中里見： お母さんが教育熱心だったんですね？

藤本： そうだったみたいです。それでまあ大学に入れたんですね、たぶんね。それで子供の頃から賑やかなところだから、芝居小屋がいっぱい立ってたんですって。それは聞いたことあるんです。よく友達とみんなでワーツと観に行って、それで好きになったと聞きました。お金もないのに、どうしたのかなと、そこがわからないですね。そういう話は何度か聞いたことがあります。貧しかったとは言っていました。

中里見： じゃあ親の影響よりも、友達と？

藤本： そうそう、そんな感じです。だから両親はあんまり影響は与えていないような。自分が勝手にというか、友達、知り合いって言ってたかな、おじさん、お兄さんとか言っていたか、記憶にないんですよ。気が合う人がいたんじゃないでしょうかね。そこを詳しく聞いとけばよかったんだけど、興味ないから、ほとんど聞いてないですよ。若いときだったから。

中里見： 中国の芝居が好きになったのは？ きっかけは？

藤本： それはまったく知らないですね。わかんないです。聞いたことないです。

中里見： 京都大学で中国文学を専攻されたきっかけは、何か聞かれていますか？

藤本： 私もなんで京劇なんだろうと思いましたね。どうして京劇なのって聞けばよかったですけどね。京劇やら何劇やら、いろいろあるんですよ？ 説明してましたけどね、父も。20歳くらいの、私も学生でしたからね。興味があればよかったんですけど、全然興味なかったの、フンフンで、半分忘れてて、兄もそんなに興味なかったみたいだし。だから父が一人で頑張ってやりました。なんで京劇なんでしょうね、本当に。父が何で中国に興味持ったのかがよくわかんないです。すごい熱心ですよ。それで、周先生、

周先生って言うてましたよ。

田村： おうちで周先生の話がされることって、けっこうあったんですか？

藤本： 何かすごくお世話になったっていう話しか聞いていないんですけどね。一度北京に行きたいなあ、とはよく言うてました。でも怖いなあ、あつちはなあ、とかなんとかそんなようなことを。「行ってくればいいじゃん」って言ったんですけど。「ちょっとあそこはいま、どうだろうな」とかって。あれなんだっけ、大変なあれがあったよね。

一同： 文化大革命。

藤本： 死ぬまでに一度は行きたいと言うてたんですけど、ダメだったですね。母だったらもっとよく知ってたんでしょうけど。なんで京劇なんだろうと、私もよく思いました。ほんと歌舞伎、お芝居は大好きで、なんかのきっかけで。その頃、京劇って有名だったんですか、日本で？ そんなことないですよ？

中塚： 京都大学だと、たぶん定期的かどうかかわからないですけど、京劇のレコードを聴く鑑賞会をやってたんですね。青木先生が支那劇鑑賞会というのをやったりされてるので、もしかしたらそういうところで接する機会があったのかもしれないね。<sup>3</sup>

藤本： 何かのきっかけで好きになったんだろうな、っていう想像しかないですね。

中里見： 旧制浪速高等学校ではドイツ語をされているんですよ。<sup>4</sup>

藤本： そうなんですか（驚）。知らない。聞いたことない。ドイツ語？

中里見： ドイツ語を第一外国語で一番たくさん勉強するコースで、英語は第二外国語です。それなのに京大では中国語に変わられた、そのへんの経緯がよくわからないんです。

藤本： 私も全然知らないですね。最初から、私が学生の頃から、京劇、京劇って言うてました。京劇が好きになったことも聞いてないし、聞けばよかったですね、今思えば。

中里見： 周作人先生の息子さんの周豊一さんをお世話したことは聞いてますか？

藤本： あー、なんかね、これが出てきたんですよ。（周豊一から濱一衛宛書簡5通、濱ふ

---

<sup>3</sup> 青木正児は狩野直喜還暦記念会（1928年）にて古典演劇のレコードを用いた講演を行っている。また、名古屋大学附属図書館青木文庫に東方文化学院京都研究所のものと思われる「研究所蔵崑曲唱片目録」が残されていること、および吉川幸次郎に「学院聴京劇唱片四首」（1934年作、吉川幸次郎『箋杜室集』研文書院、1981所収）と題する漢詩があることから、当時の京都大学周辺には一定程度、中国古典演劇のレコードに触れられる環境があったと考えられる。なお、「崑曲唱片目録」には1920～30年代発行のレコードが掲載されており、濱先生の入学・留学の時期を跨いでいる。中塚亮「青木文庫所蔵SP盤レコード目録稿」（『名古屋大学附属図書館研究年報』8, 2009）61頁参照。

<sup>4</sup> 濱先生は大阪府立高津中学を卒業後、1927年4月に浪速高等学校の文科乙類に第一期生として入学している。文科乙類はドイツ語を第一外国語とするコース。中里見敬「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015）3-4頁参照。

み宛書簡 2 通を取り出す)

一同： あっー、これはすごい！

中里見： 豊一さんの手紙ですね。

藤本： これなんですけどね。これもそうですよね。これがおかしいんですよ。私の母、ふみって言うんですけど、亡くなったあとですね、父が。父が亡くなったことを（書いてあります）。（周豊一の妹・静子が亡くなったことを記した手紙を見ながら）これは、なんか兄妹がたくさんいらしたようですね<sup>5</sup>。これもよくわからないけど、きれいな字で。

中里見： 周作人先生のお手紙はないんですか？

藤本： ないですよ。母が何か言ってたような気もするんですけど、適当に「フン、ハイハイ」って聞いてたもんだから、ちょっとそこがわからないですね。ずいぶん前ですよ、周作人先生が亡くなったのは？

中里見： 1967 年です。

藤本： あー、そんな前なんですね。（周作人の手紙は）結局はなかったのかな。

中里見： （周豊一の手紙を見ながら）文革後でしょうね。これはたぶん文化大革命が終わって、手紙が自由にやりとりできるようになって、文通を再開されたあとのものですね。

藤本： それまではダメだったんですね。

中里見： 文化大革命の 10 年間ぐらいは。

藤本： あー、10 年間も。それはすごい時代だったんですね、文化大革命って。10 年も。

田村： 「最後のお便り」って書いてありますね。

藤本： なんかすごく親しかったみたいですね、この豊一さん。2 つか 3 つ下ってというか、父が 3 歳くらい上だった感じですよ。ちょっと読んだんですけど。

中里見： 浪速高等学校の後輩です。

藤本： あっ、留学か何かされてたんですか？ 日本に？

中里見： 大阪で先にお世話をして、そのあと濱先生が北京に留学したときに、豊一さんがうちにおいでと言って、それで周作人先生のところに下宿することになったようです。



図 1 濱一衛（左）と周豊一（右）

周豊一「憶往二三事」（『颯風』19, 1987）

原載（写真提供：中島長文氏）

<sup>5</sup> 濱先生の留学当時、八道湾の周作人邸では、周作人一家（信子夫人と豊一、静子、若子の三兄妹）、弟・周建人一家（芳子夫人と馬理、豊二、豊三の三姉弟）がいっしょに暮らしていた。また、羽太信子・芳子姉妹の両親や、信子の兄・重久夫婦が同居していた時期もあったらしい。

藤本： よかったね。周作人先生、すごい好きみたいで、一番言ってたから。あー、そういう関係ですか。

中里見： 最初に濱先生が豊一さんを大阪でお世話しているんですよ。

藤本： じゃあ、京都大学に？

中里見： 京大には入らずに、浪速高等学校で。

藤本： 何年くらい日本にいらしたんでしょうか？

中里見： それが半年くらいで退学して帰国してるんです。満洲事変が起こって。<sup>6</sup>

藤本： あっー、戦争の影響が大きい。

中里見： せっかく苦労して入ったのに、戦争の被害というか。入学前後にずっとお世話されて、たぶん受験勉強なども濱先生が手伝ってあげたのではないかと想像するんですけど。一緒に遊んだ思い出などを、豊一さんが文章に書かれています、晩年に。宝塚に濱先生が豊一さんを連れて行って、観たこともあったらしいです。<sup>7</sup>

藤本： 宝塚？ あー、知らないことがいっぱいありますね。

中里見： 豊一さんから見ると、濱先生が日本人の中で一番親しい友人だったと、書かれています。

藤本： 合山先生ってご存知？<sup>8</sup>

中里見： はい。

藤本： あの方から母に手紙、年賀状とかよくいただきました。読んだことがあります。よ

---

<sup>6</sup> 周豊一「記憶の中から：荻廬雑憶」（『颯風』14, 1982）14頁参照。さらに、周豊一「記憶の中から：荻廬雑憶（二）」（『颯風』15, 1983）によると、九州帝大の大学院入学が内定していたが、1937年の盧溝橋事件によって、これも実現しなかった。

福岡で二三日滞在した。厚くもてなされて、僕が申し込んだ、国の大学を卒業したら九州帝大の大学院へ入籍する願いも、快よく領かれて僕を大いに悦ばした。それで一切円満に事がおさまったので有頂天になって福岡を離れ、門司で上船して国へ向ったのだ。

ところが、人間は常に運命に弄ばれるという古い話の如く、冬休以来企てたことは、七月七日の日本軍国主義による罪惡に充ちた軍事行動で悉く碎かれてしまい、何にもかも黄梁の夢になった。情けないこともうこの上なし、なんて儚ない人生だろうと思った。（37頁）

<sup>7</sup> 周豊一「憶往二三事」（『颯風』19, 1987）33-34頁参照。

<sup>8</sup> 合山究（1942～）九州大学名誉教授を指す。濱先生の九大での受業生。1973年より2006年まで九州大学教養部、大学院比較社会文化研究科で助教授、教授を歴任し、定年退職された。主著に『明清時代の女性と文学』（東京：汲古書院、2006）；中国語訳：蕭燕婉譯注『明清時代的女性與文學』（台北：聯經出版、2017）、『紅樓夢』：性同一性障碍者のユートピア小説』（東京：汲古書院、2010）；中国語訳：陳翀譯『《紅樓夢》新解：一部「性別認同障礙者」的烏托邦小説』（台北：聯經出版、2017）ほか多数。訳書に林語堂著；合山究訳『蘇東坡』（東京：明德出版社、1978。のち東京：講談社学術文庫、1986-87）など。1996年から2年間、九州大学附属図書館教養部分館長も務めた。

くうちに見えてましたもんね。いまはお元気ですか？

中里見： はい、お元気です。濱先生の学生さんで一番親しいのは合山先生ですか？

藤本： はい、合山先生です。ときどき見えてましたもんね、うちに。何度か挨拶したことも。何人かでよく集まってましたね、狭いところに。本がこんなにある。あとは小西先生もよく奥さんといっしょにうちに遊びにいらしてました。小西君、小西君って父が言ってました。<sup>9</sup>

中里見： 学生さんがよく来られてたんですか？

藤本： まあ、よくってうか、ときたま来られてましたよ。ワーツと5, 6人。

中里見： 合山先生からお正月に酔っ払って濱先生のお宅に押しかけたことがある、と伺いました。どこかでお酒を飲んだあとに、濱先生の家には押しかけたと。

藤本： そうですか。いつ頃だろうね？

中里見： 小笹団地の。

藤本： 私が結婚したあとかもしれんね。早いですね。あつという間に過ぎ去ったというかね。あんまり知らないですよ、20歳くらいの娘だから。母の方がもっと詳しいと思いますよ。よく見えてたときに、「お茶、あんた出しなさい」、「いやいや」ってよく言っていたの覚えています。「お母さん出して」とか言って、「いや、恥ずかしい」とか言っていたの覚えています。

中里見： 康子さんも九大で？

藤本： 私は西南（学院大学）です。

中里見： 西南を出られて、九大の図書館で？

藤本： 職がなかったので、大学出たあと、それでアルバイトならあるよって言われて、父が「行く？」って言うから、「えーっ」て言ったけど、図書館ならいいかと思って、それでそこで。昔はタイプライターだったんですよ。あれを打ってたから、英文で、そういうのを5年くらい。実際はタイプを打つ仕事はほんの少しで、ほとんど雑用でした。卒業してすぐアルバイトして、アルバイトのあと、非常勤何とかで3, 4年して、それで結婚したんです。26くらいまでやって、「はよお嫁に行かんといけん」とか言って。

中里見： 非常勤何とかというのは教養部のですか？

藤本： 教養部の図書館にいましたね。

---

<sup>9</sup> 小西昇（1924～1981）福岡教育大学教授を指す。在職中に心筋梗塞のため急逝した。没後に刊行された小西昇『漢代楽府・謝靈運詩論集：小西昇中国文学論集』（福岡：葦書房、1983）に師の目加田誠が追悼文を寄せている。いま『目加田誠著作集 第8巻 中国文学随想集』（東京：龍溪書舎、1986）に「小西昇君のこと」として所収。

中里見： 初め図書館で、そのあと教養部の事務ですか？

藤本： ちゃんとした正式の事務ではないですよ。

中里見： 共同研究室の助手みたいなのですか？

藤本： いえいえ、事務員です。まわりにいっぱい人がいました。その一人です。最初は図書館です。古い図書館ありましたでしょう。

中里見： 六本松の教養部分館？

藤本： あー、そこにいました。それから人事課の方に、いま思い出しました。人事課で2年くらい。それでもうそろそろ早くお嫁に。全部で5年くらいで、何年図書館にいたかな？ 半々くらいかな。あっ、父が図書館長みたいなものになったんですよ<sup>10</sup>。それでいっしょはいかんということで、じゃどこか、どこでもいいです、みたいなことになって。人事課に行って、5, 6人か、7, 8人かいて、そこへ行って。図書館の方が長かったかもしれません。3年くらい。ちょうど5年くらい。

中里見： 西南では英文科ですか？

藤本： 英文科です。理科とか数学が苦手で、全然。父とよく似ています。計算ができないって、母がよく、「こんなのもできないの、あんたは」って。「そっくりね、お父さんと。計算が遅い」って。だから文系じゃないとダメ。

中里見： ふみお母さんも、お芝居は一衛先生と話が合うくらいのレベルだったんですか？

藤本： 歌舞伎が大好きで。こっち（名古屋）に来たときも、名古屋の御園座に行きましたよ。宙吊りの。

田村： 市川猿之助。

藤本： あまり観たことないからね、早くキップ取らんとなくなるって、母が電話してきて、いっしょに行きましたよ。東京にいたときも。東京も父といっしょに来たときに、歌舞伎座とか大好きでした。あと古本屋さんによく行ってました。

藤本知道： 早稲田とか。神田とか。

藤本： 私は父に似て方向音痴なもんで。主人に地図を書いてもらって、古本屋に行くのが楽しみって言って、一人でよく行ってましたよ。地図持って、「ようわかったわ」とか言って。近くを歩いている人に聞いても、案外わからないんですって。地図書いてもら

---

<sup>10</sup> 1969年4月から1973年3月の定年退職まで4年間、九州大学附属図書館教養部分館長を務めた。『九州大学百年史』第11巻 資料編IV「教員一覧」によると、1949. 8.31-1951. 3.30 文学部助教授、1951. 3.31-1953. 2.28 教養部助教授、1953. 3. 1-1973. 4. 1 教養部教授とある。

って、一日中行ってたような気がします。本屋は大好きです。早稲田大学は集中講義って言ってました。集中講義は京都大学と早稲田大学に行ったようですね。

中里見： 本はいっぱい買われてたんですか？

藤本： 古本を？ さー、覚えてないですよ。買ってなかったよね、別に。買うこともあったけど、そんなに買い込むことはなかったような。「気をつけて行ってね、迷子にならんように」って言って。元気だったよね、あの頃は、あちこち行くのが好きで。

藤本： 定年後、西南と福大（福岡大学）に行っていましたね。

中里見： ずっとお話は大阪弁ですか？

藤本： そうですね、父は大阪弁です。「みんな笑う」って。「授業を大阪弁でやると、みんな笑うわ」って。それで講義中に、こそっと抜け出す学生もいたんですって。「こらっ、あかんぞ」とか言って、ばーっと追いかけて行って、「もう落とすぞ」と言って脅かしたって、そんな話も聞きました。それは父から直接聞いたんです。みんなわーっと笑ってたって。「ちゃんとまじめにやらんなあかん」って言って怒ったんですって。「こそっと抜け出すとは何事だ」って。すごい大きな声で怒鳴るから。

中里見： ふだんは温厚で優しくかったんですか？

藤本： そうですね。ふだんはそうね、大阪弁でいつも笑わせてましたね。誰かが、「先生はいつも話し合いをすると、みんなが笑ってます」って言うから、「えー、そうなんですか、それも恥ずかしいよね」って思っていました。「大阪弁がどうもあかんらしい」って本人は言っていました。関西弁はどうしてもそうなりますよね。父はよく言っていましたね。

中里見： 目加田先生がそのようなことを書かれていますね。話が上手で、座談の名人だと。

11

藤本： そうですね。みんなに言われるみたいですね。

中里見： ご自宅でも濱先生が中心にお話しになる感じですか？

藤本： そうですね。おしゃべりするの好きですね。なんだかんだ言ってました。母なんかテレビ見ていて、全然聞いてませんが、私が相槌打たんと、「聞いとるか！」って。だから「はいはい」っていう感じで。おしゃべりは好きでした、アルコールが入ると。

---

<sup>11</sup> 目加田誠「浜さんのこと」（『中国文学論集』第4号、九州大学中国文学会、1974；のち浜一衛『支那芝居の話』東京：大空社、2000に再録）に、次のようにいう。

浜さんの話上手は誰も知るところだが、戦争中、浜さんの乗っている輸送船が魚雷に追いかけられたときの、スリルに満ちた話など、なんと聞いても真にせまる。浜さん一流の話術で、聞く者はゲラゲラ笑いながら、その実すさまじい感動を与えられるのだ。（7頁）

弱いんですけどね。だからすぐ酔っ払っちゃって、昔のことやら、面白いことやら、しゃべるの好きでしたよ。だからにぎやかだったですね、家の中は。母はあんまり聞いてなくて、「またお父さんがしゃべりだした、止まんわ」みたいな。母も大阪弁ですから、二人とも。ご近所だったようです。山名と濱と。

中里見： 幼馴染みですか？

藤本： 母が女学校のときに、父の兄から勉強を教えてもらっていた関係で、知り合ったらしいです。

田村： 昔からの知り合いですね。

藤本： そうです。山名の方は判子屋さんで、でも父の方は貧しくて、という感じで。それでアルバイトみたいに教えに来てたようです。山名の家は一人娘だったから、すごく贅沢だったようです。そんな話は聞いたことがあります。それは母が言ってましたかね。

田村： 濱先生は何歳のときに結婚されたんですか？ まだ学生だったんですか？

藤本： 6歳違ってたから、母が22のときだから、28かな。私は昭和19年生まれで、一番上の兄が昭和14年生まれ、二番目の兄が昭和16年生まれ、そして私が19年生まれです。伯父と勉強教えに来てた関係で知り合って、そんでどうのこうのって。「伯父さんとやなくて、結婚したのは違ったんやね」って聞いたら、「知らないうちにそうなった」みたいなこと言うてましたよ。

中里見： 旧制灘中学で1年間教えておられるんですが。

藤本： あー、そんなこと言ってましたね。あの有名な人、小説家の人。キリストの。えーっと。

田村： 遠藤周作？

藤本： あー、そうそう。その人を教えたって言ってました。それでいつか市民会館で、遠藤周作原作のなんとかってというのがお芝居になったというので、父と二人で観に行ったことがあります。そのときに遠藤周作、背が高いんですね。「娘です」「はじめまして」って言って握手してもらいました。

田村： 遠藤周作と？

藤本： 父が行ったら、来てくれたんです。20歳くらいで、学生だったです。ちょっと挨拶して、「どう？」とか二人でいろいろ話していました。私はソファに座って、早く終わらんかなって。帰るときだったでしたから、お芝居が終わって。何の原作だったかはちょっと忘れちゃったけど。それで、「遠藤周作ってすごく有名じゃない、すごいね」って言ったら、「勉強あんまりできんやったけどな」みたいなこと言ってました。「そんなこと言ったら失礼じゃないの」って言ったら、「こんなに立派になったもんだ」とか父が言っ

て。お芝居観たあと、そんな話をしましたね。「秀才じゃなかったなあ」とか言っていました。

中里見： 遠藤周作も濱先生のことを覚えていたのですね？

藤本： そう。それで出て来てくださったみたいですね。周作先生が「あらーっ！」とか言って握手してましたからね。顔は覚えていたみたいね。「一年だけだから覚えとるかどうかわかんけどな」とか言いながら。二人でしゃべってましたね。ちょこちょこと芝居のこと話して「失礼します」って帰られた。忙しそうだった。ちょっと出て来てくれたから、父もうれしかったみたいです。有名人だから。それは灘中でしょ？ なんかみんな勉強できる人が多いんですかね、あそこ？「その中じゃちょっとあかんかった」って。「そんなこと言ったらいかなでしよう」って言ったら、「秘密やで」って。ここでしゃべったらなんにもならんけど、秘密にしてください（笑）。

田村： 慶應に進学されたのですね。

藤本： 熱心なキリスト教の方だったんでしょう？

田村： 本人も灘ではすごくできが悪かった、って自分でも書かれています。

藤本： それで、父も「いまいちだったな」って。「え、そうなの、あんなすごい人が」って。「誰にも言ったらあかんで」って父が言うので、いま言うのが初めて。

中里見： ほとんどの人が東大か京大に行くでしょうから。

藤本： だから目立ったのかもしれないね。周りが秀才ばかりで。本当はそんなに悪くなかったんじゃないですかね。

中里見： 濱先生が九大で教えておられたのは中国語ですか？

藤本： 中国語と中国文学も教えていました。文学部の方にも行ってました。教養部だけじゃなくて、文学部にも週に何回かわかりませんが、教えに行っていましたね。中国語って難しそうですもんね。よくうちで父がラジオかレコードで中国語をいつも聞いていました。でも慣れてくるとけっこう違和感なくなるんですね。最初は変わった、中国語ってこんなものか、と思ってました。そのころの日本ではまだ中国語はあんまりね、ヨーロッパやアメリカの方ばかりだったでしょう。「へー、これが中国語？ お父さん、よくそんなヘンテコリンなのしゃべれるね」って。大きな声でしゃべってましたよ。練習してたんでしょうね。

中里見： 毎日ラジオで？

藤本： ラジオも。それからレコードみたいな何か。そのときに京劇の、すごい（かん高い声で）「きーっ」っていう声でしょう。あれもよく聞いてました。うちで。そんなこと

ばかりしていたような気がする。

中里見： 濱先生は京劇を唱われていましたか？ レコードを聴きながら唱われてましたか？

藤本： やってましたよ。「大きな音ね」て言ったら、「これくらい大きな音やないと、あかんのや」とか言いながら。いつも一人で楽しんでました。

中里見： 自分で唱われてましたか？

藤本： 唱うって、真似してね。

中里見： レコードといっしょに？

藤本： 中国語も勉強してたみたいですね。発音とか。よう聞いてましたね。中国語は馴染みになりましたね。いつも聞いていると。その記憶はあります。

中里見： どなたかがどこかで濱先生は京劇を唱うことができたと書かれているのですが、もうそれを聞いた人はほとんどおられないので、康子さんに確認できてよかったです。

藤本： 真似して練習していたという記憶はありますね。

中里見： かん高いような声で？

藤本： そうそう、「ヒヤーン」って。あんまり言って傷つけたらいかんと思って、そっと障子閉めてね。「うるさいね」って言ったりして、そんなことしゃべった記憶はあります。楽しいみたいですよ。なにしろ中国に行ったときの話はよくしていました。あちこち行ったみたいですけど、一番怖いときだったんですね。戦争のときの。中国服も着ているし、しゃべらないようにして。

中里見： 日本人だとわからないようにして。

藤本： そうそう。しゃべると訛りがあるから。警察官みたいな人がいっぱいいると怖かったって。何がどうなるかわからん。そーっと静かにして、いつも新聞広げてたって。声かけられないように。よくまあそんなところ行ったなと思うんですけどね。それでも行きたかったみたいです。

中里見： 中国でたくさんお芝居を観ておられるんですけど、そうやってこっそり隠れるようにして観てたんでしょうか？

藤本： それはどうなんでしょうね。そこまで詳しくは聞いてませんが。泊まる場所も、なんか変なところやけど、泊まる場所がないから泊めてくださいって言って、泊めてもらったこともあるけど。田舎の方まで行って、お芝居を観たかったようです。いろんなお芝居を。そのときに、ここは大丈夫かなと思って、聞いてみて、そしたら寒くて、こんなところかと思ったけど、それでも仕方なくて、震えながら寝た、みたいなこと言ってましたよ。田舎の方だったから、そうだったんでしょうね。そんな話はしてしまし

た。「ようそんな怖いところ行くね」って。おトイレとかも汚くて、どうしようもないくらい汚かったって、そんな話はしていました。今は中国もきれいになっているんでしょうね。観光客も多いし。そういう話をするのは好きでしたね。「あのな」って言って、暇なときにしゃべっていましたよ。フンフンって半分しか聞いてませんでしたけど、いろんなこと言ってました。でも楽しかったんでしょう、すごく。楽しそうに、「こうやった、ああやった」って。「よかったね、無事で」と思いましたよ。いつどうなるか、運が悪かったらね。本当に、大変だったんじゃないですかね。中国まで。船で行くんですかね？ようそんなにまでして行きたかったんだと。中国のお芝居を観たかったんですかね。京劇のほかに、いろいろありましたよね。父がいろいろ説明してましたけど。

中里見： 崑曲、崑劇とかですか？

藤本： あー、そうそう。どうのこうのが、どうなってこうなって、一緒になってとか言っていたのは覚えてますけど、内容はわかりません。しゃべりだしたら、ずっとしゃべるので、大阪弁で。だからみんな笑うんでしょう。よく笑ってましたよ、みんな集まったら。お父さん一人でよくしゃべってたね。おしゃべりが好きというか。懐かしいですね。思い出すと。

中里見： 周作人先生のお話もよくされてましたか？

藤本： あんまり。ただ周先生のごことはすごい尊敬しているみたいなのはあんだけど、その先生についてこうだった、ああだった、というのはあまり聞いたことがない。この何だったっけ？

一同： 豊一さん。

藤本： 息子さんのこと、全然聞いてないです、私は。母の方はよく知っているみたいね。

中里見： 周作人の奥さんが日本人なんですよ。

藤本： そうなんですか。初めて聞いた。

中里見： 豊一さんの手紙も日本語で、日本語が達者なので、すごく留学中、居心地がよかったんだと思うんです。

藤本： ああ、日本人の方？ 何とかさんて言われるのかな？

一同： 羽太信子さん。

中里見： 豊一さんの弟妹も何人かいますよね。にぎやかな家庭で、食事と一緒にしていたみたいで。

藤本： そんな話はほとんど聞いてないですね。

中里見： 「ハーマ、ハーマ」って、中国語ではガマガエル（蛤蟆 háma）の意味なんですが、それでからかわれて、小さいお子さんに笑われたりしていた、ということを豊一さ

んが後で書かれています。そんなにぎやかな中で、留学中も寂しい思いもせずに。<sup>12</sup>

藤本： 楽しかったみたいなことは感じますね。ちょっとしたことばの端々にですね。中国はよかったって、行って楽しかったみたいなことは。2年半でしたっけね？

中里見： ちょうど2年です。

藤本知道： 魯迅の話は？

中里見： されてましたか？ 周作人のお兄さんなんですけど。

藤本： 魯迅の話はしてない。してなかったと思う。

中里見： 周作人と魯迅は兄弟で、二人のお母さんが魯迅のお嫁さんと北京の別のところに住んでいたんです。その頃、魯迅は上海の方へ行っていて、北京にはいなかったんです。濱先生は魯迅・周作人のお母さんに会いに行かれたことがあったようで、そのことが講義ノートに書いてあります。お母さんは新しいタイプの女性だったのに対して、魯迅のお嫁さんはもの静かな女性だったというようなことが書かれていたと思います。<sup>13</sup>

藤本知道： そのことは聞いてないです。

藤本： 私はまったく聞いてないですね。魯迅のことは全然。最初、周作人って有名な人なのって聞いたら、「魯迅の弟や」って。息子ではなかったですよ。たくさんおられるんですね。

中里見： 三人兄弟です。一番下の方も有名な生物学者です。

藤本： へー、すごいね、三人ともって。

中里見： (三番目の) 周建人の奥さんも日本人で、羽太信子の妹(芳子)です。姉妹でそれぞれ周作人・建人兄弟に嫁いだということです。濱先生が留学されたときは、北京の八道湾で周作人・建人兄弟の家族と一緒に暮らしていたのですが、周建人はだいぶ前から上海の商務印書館という出版社に勤めていて、奥さんや子供と離ればなれだったようです。

---

<sup>12</sup> 周豊一「憶往二三事」(『颯風』19, 1987) 33頁参照。

<sup>13</sup> 濱先生は、講義ノート「中国文学略説 其三 昭和二十六年度」(浜文庫／日文戯曲／21)に以下のように記している。

この朱安との関係は奇妙で離婚しなかったというだけ。私も北京で会ったことがあるが、古い型の女である。あまり会話が通訳つきなのでできなかったが、母魯氏の新しい感じと凡そ反対。この母とずっと生活していた。生活費は魯迅が持った。ともかくこの朱安は母の与えた妻、というだけ。こう回想している。「家人はその時、私が新人であるというので、祖先にも礼拝せず、旧式の儀式にも反対するだろうと心配した。しかし私はだまって彼等のいうままにした」と回想している。彼は甘んじて母の犠牲になったのである。

藤本知道：（中里見が出した写真を見て）この写真は小川環樹先生ですよね？

中里見： はい、九州大学の目加田誠先生と、京都大学の小川環樹先生です。

藤本： 湯川秀樹の弟さんなんでしょう？ お宅にいったことあるって、しゃべってましたね。すごい立派なお宅で、貧しかったでしょう、父は。それでカステラが出てきて、ワーツと思って食べたら、味がうちで食べるのと全然違う、超うまい、みたいなことを言って、それは何度か聞きました。あんなの食べたことなかったから。立派なお宅で、「母上」とか言って、「上品なあんなお宅に環樹さん住んどったんや」言うて。そんな話は聞きましたね。学生時代に「来てくれ、来てくれ」言われて行ってみたら、立派な家の、広さも五倍か十倍か、すごかったって、びっくりしてましたよ。昔の（大学生は）、けっこうお金持ちの人が多かったみたいですね。父みたいな貧しい人はあまりいなかったみたいです。大学行く人も少なかったでしょうしね。四人兄弟なんでしょう、環樹さん。みんな学者で。それはよく話してました。ノーベル賞もらった人は二番目。茂樹さんっていう人が一番上で、四人男の子ばかりで、みな学者さんで。<sup>14</sup>

一同： お父さんは小川琢治という地質学者ですね。

藤本： この方が目加田先生で、もう一人は？

中里見： 周豊一さんですね。

藤本： あー。どこなんだろうね、場所は。

中里見： 北京の北海公園です。スケートをされたときの。

藤本： あー、スケート、氷の上なの。凍ってるわ。

中里見： その話はされてませんか？

藤本： 知らない。初めて聞いた。

中里見： 目加田先生の娘さんは、この話をよく（写真提供：東谷明子氏）

聞いたそうです。目加田先生が自分はスケートができるんだ、北京ではよくスケートをしたという自慢話を、家でされていたらしいです。

藤本： じゃあ、父はすべって転んで、心得がなかったのかな。初めて聞きました。ヘーエ、本当だ。スケート靴だね、よく見れば。おもしろい。



図 2 「文質彬彬たる学者諸公のスケートイング姿」北海，1934年12月，左から周豊一，目加田誠，濱一衛，小川環樹

<sup>14</sup> 正しくは、長男の小川芳樹は冶金学者。次男の貝塚茂樹は東洋史学者。三男の湯川秀樹はノーベル賞を受賞した物理学者。四男の小川環樹は中国文学者。五男小川滋樹<sup>ますき</sup>は第二次世界大戦で戦病死している。小川環樹には、濱先生との交遊を綴ったエッセイ「冬の柳川」（『文藝春秋』1959年2月号、のち小川環樹『談往閑語』東京：筑摩書房，1987；『小川環樹著作集』第5巻，東京：筑摩書房，1997所収）がある。

中里見： 豊一さんは遊び上手な方だったようですね。当時としては派手で。歌手と婚約されていたということ、最近、西村正男さんが発掘されたりして。ちょうどこの時期ですが、濱先生はそのことをご存知なかったのでしょうか。男同士でそういう話はしなかったのか。でもその歌手は結婚する前に若くして亡くなるんですね。<sup>15</sup>

藤本： その話は聞いたことないですね。

中里見： 濱先生の集めた資料を九大に濱文庫として受け入れることは、濱先生の意思だったのですか？

藤本： 何も聞いてません。ただ母が、まだ父が元気だったときに、「こんなものどうすればいいの。お父さんいまは元気だけど、もし死んだら」「困ったな、こんなどこにやってもしょうがないけど、わしにとっちゃあ、宝物なんやけど」なんて言うもんですから、私に聞かれてもね、「どうしたらいいやろうね」って。なんでそうやって受け入れてもらったのか、私はわからないです。こっち（名古屋）に来てたから。母が誰かに相談したんですかね？

中里見： 合山先生が事務の方と相談して、お金のやりくりも考えられて、東大の田仲一成先生という方も協力されて、それで受け入れが決まったらしいです。

藤本： あー、そんなにお世話になったんだ。何にも聞いてないです。大変だったみたいなことは、言ってみたんだけど。「いっぱい学生さんが見えて、持って行ってもらった」みたいなことは言っていました。そのときに持って行くものと、行かれないものに分けられたみたいで。この掛け軸4点は、全然何も見られなかったんじゃないでしょうか。「ここにあるものは大事にとっておいてください」みたいに言われたから、「それじゃあ、いらないんだな」くらいに思って。母も中身は知らないから、そのまま置いてあったんでしょう。「捨てるのもいかんわ、父が大事にしていたから。それで私にこれが残っているよ」と言われて、「ハーッ、これどうしようか」と押し入れにしまっただけです。チラッと見たんだけど、漢文みたいなので、「これ全然わからんわ」とか言って、それでしまっただけです。誰も何にも関心がなくて、そのまま取っておいたんです。何て書いて

---

<sup>15</sup> 西村正男・関西学院大学教授の調査によると、婚約の相手は孫徳志（1917～1935）だったとのことである。孫徳志は国立音楽専科学校に入学、ソプラノ歌手として期待されたが蘇州公演時にチフスにかかって亡くなったという。周豊一「記憶の中から：荻廬雜憶（二）」（『颯風』15, 1983）35頁に、以下の記述がある。

実はその前前年の八月に上海で許嫁者の孫謚——仮りにつけておくが、十八になる娘さんに死なれてから、ずっと女に近寄らずにいた。方々から来るご好意も断り、一人で好きなことをしていた。

あるかもわかりませんし。掛け軸のことは、先生から言われたんではたっけ？ 先生が最初、「掛け軸ありますか」って言われました？

中里見： はい、そうです。去年初めて公開された『周作人日記』の1939年のところに、「濱君に請われて自分の書と、友人の書、全部で4点を贈る」といったことが書かれていたのです。それで康子さんに、「掛け軸ありませんか」と伺ったら、ちゃんとあったんですね。濱先生の奥さんがこの掛け軸だけは残しておこうと思っておられたのかな、と思ったのですが。

藤本： 「さっささっさ運ばれて行って、これは置いて行って、あと何かもあった」って言ってたけど覚えてない。これといっしょにいくつかね。「これは掛け軸だから、大事に取っておいて下さい」って言われたと、ああ、そうなんだと。母は「これくらい取っておかないと」と思った、そんなことは言ってました。ですから、あのとき持って行かれば、それはそれでよかったですけどね。そのまま私が受け継いで、押し入れに入れておいたんです。

中里見： 濱先生は日記など残されていませんか？

藤本： 日記は残してたけど、もう捨てちゃったんですよ。母が捨てたんですよ、ほとんど。取っておくには多いし。私よく学校から帰ったら、父がこうして書いてるので、「何してるの」って聞いたら、「これは字の練習や」とか言って。和紙にね。母が捨てるときに、「これお父さんが書いたものやから」って言うので、私も読みながら捨てました。

中里見： 留学中の日記があれば、貴重な資料だと思うのですが。

藤本： 年取ってからのもんです。「康子、何時に帰る」とか、「室見川に散歩に行く」とか、そんなことばかりです。お習字の練習のつもりで書いていたのでしょう。昔は日記をつけていなかったような気がします。100パーセントはわからないですけど。

中里見： 写真をお母様のふみさんから、中島長文先生にお譲りしたというのは？

藤本： 何の写真ですか？

中里見： 留学中の写真などを、先生が亡くなったあと、ふみさんが京都の中島先生にお譲りしたという話を聞いたんですけど。

中里見： 濱先生はカメラがお好きだったんですよ。

藤本： はい、カメラ好きでした。撮ってました。真っ暗にして、現像して。自宅で真っ暗にして、私が入ると、「アカン」とか言って。明るいのはダメなんでしょう、あれ。いつも真っ暗にして、一人で何かやりました。

藤本知道： 風呂場のところに毛布をかけて、真っ暗にして。お風呂場で。

藤本： みんな四畳半でね、うちは。母が「康子ちゃん、入ったらいかんよ」って言うのに、間に合わんで入ってしまったって、「アア」っていうようなことがあったのは記憶にありますね。一度か二度。うちに帰ったら、閉まってるので、開けて入ったんですよ。明るくなったらダメなんですって、あれ。

中里見： その写真は残ってませんか。

藤本： 最近の家族で撮ったものです。唐津とか、家族でよく行ってましたね。3人子供連れて、若い頃、高校生とか中学生の子供連れて、家族5人でよく行ってましたよ。その写真とかはありますけど、古いのはないですね。あったのかもしれないけど、私には記憶にないですね。

中里見： 濱文庫に何冊かアルバムがあって、それは濱先生が整理されたお芝居関係の写真ですね。

藤本： 私も一度行ったんですよ、濱文庫。母が元気なときに。

中里見： 六本松の？

藤本： そうそう。

中里見： ぜひまたおいで下さい。来年の夏には箱崎キャンパスもなくなって、伊都に移転するんです。

藤本： 伊都？

中里見： 糸島の方です。1年後には箱崎もなくなります。すでに六本松キャンパスはなくなりました。

藤本： 六本松のことは友達から聞きました。いまどうなってるんですか？

中里見： マンションと商業施設、それに裁判所が入ることになっています。福岡城址を公園にするらしく、裁判所があそこを明け渡して、六本松に移転するんです。

藤本： 平和台球場はどうになりました？ 懐かしいな、よく行ったわ。父は野球が好きで。西鉄ライオンズが大好きで、ラジオで聞いてましたよ。一所懸命。

中里見： タイガースのファンかなと思ったんですが？

藤本： なんでだろうね。西鉄ライオンズでしたね。野球は大好きでした。ラジオで聞いて、「負けた」って言ってパッと消すんです。勝ったら、解説の人がいろいろ言うのを、「ウンウン」て言いながら、うれしそうに聞いてるんです。

藤本知道： いまもこれは（康子夫人を指しながら）野球ファンです。

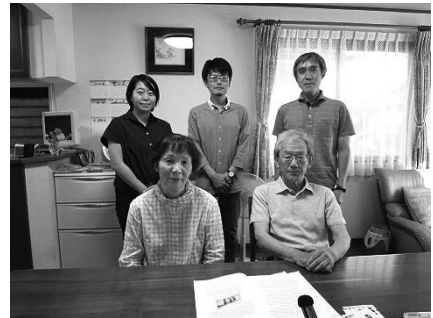
中里見： ドラゴンズですか？

藤本： いえ、ライオンズです。福岡の友達はみんなソフトバンクホークスの方ですけど、私だけライオンズのまま。「弱いね」って言われて、ソフトバンク強いから。よく思い出

しますよ。父がいつも「行こう、行こう」言うてね。一人じゃつまらん。母が興味ないんですよ。私が大好きやから、「行くよ、行くよ」って言って。二人でバスに乗って。すぐですからね。小笹から。帰りはタクシーでピューッと。最後は弱かったですけどね。一時期強いときもあったでしょう。稲尾が好きでね。応援してました。「がんばれー」って。父は好きなことがたくさんありましたね。

中里見： 趣味が多いんですね。

藤本： そう、趣味が多いんです。母と一緒に、よく旅行にも行ってました。カメラで写すのが好きで、あの狭いところで現像までしてましたからね。思い出はいっぱいあります。本当に懐かしい。こんな話、あんまりしないから。はやいね。この書の掛け軸はお役に立てて下さい。



中里見： みんなでいっしょに写真でもいかがでしょう？  
本日は長い時間、貴重なお話をありがとうございました。

図 3 インタビュー当日の様子  
前列左から藤本康子、知道ご夫妻  
後列左から田村、中塚、中里見

附：周作人より濱一衛に贈られた書 4 点

ここでは詩については釈文のみとし、書の由来を理解するうえで参考となる跋文および書簡については大意を付すこととする。また、既刊のテキストとの文字の異同について校異を記す。ただし、繁体字と簡体字のような字体の違いは一々記さない。

#### 1. 周作人「苦茶庵打油詩」其三（擲鉢詩）（図 4）

粥飯鐘魚非本業， 砍柴挑擔亦隨緣。有時擲鉢飛空去， 東郭門頭看月圓。

古有游仙詩， 今日偶寫此， 豈非游僧詩耶。廿七年十二月十六日 知堂 「冷煖/自知」  
印

この詩は、民国 27（1938）年 12 月 16 日に作られ、『宇宙風』1939 年 6 月 16 日に発表された。いま王仲三箋注『周作人詩全編箋注』（上海：学林出版社，1995）6 頁、および止庵校訂『周作人自編文集：老虎橋雜詩』（石家莊：河北教育出版社，2002）88 頁に収録。また中里見敬「新公開の劉承幹と周作人の日記に見える濱一衛：兼ねて濱文庫所蔵『春水』手稿本を論ず」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2016/2017）も参照。

【校異】王仲三箋注本および止庵校訂本は（ ）内の字に作る。

第一句「業」（色），第二句「斫」（劈）。「十二月十六日」（十二月十六日作）。

ともに跋文「古有游仙詩，今日偶寫此，豈非游僧詩耶」はない。

王仲三箋注本は、「魚：木魚。」「鉢：和尚喫食用的器具。」「東郭門：作者家郷紹興的城門名。」と注し、さらに箋を付す。

【跋文の大意】

藤本康子様所蔵の書には、跋文（「古有游仙詩」以下）が付されている。大意は以下のとおり。

昔は遊仙詩というものがあつたが、今日たまたまこのような詩を作ってみた。遊僧詩といつてもよいのではなかろうか。民国 27 年 12 月 16 日 知堂 「冷煖/自知」印

## 2. 俞平伯「天津雜詩六首 附跋文」（図 5）

西傾殘日終無語，不盡東行客子愁。圓月輝然臨莫野，滄波還是與天流。

朝市滄桑幾變遷，依稀風物有前緣。南來初駐伊家日，回首匆匆十六年。

左右長橋度彩虹，大沽河水映艨艟。金銀佳氣樓臺景，都在輕車一望中。

勸君莫話平生事，塵景廻看也寂寥。何限浮屠三宿感，石橋重見晚來潮。

才到中年改鬢絲，秋深髡柳未堪悲。海河欲暝風如剪，獨有寒沙動客衣。

換却巢痕燕子泥，凭闌人阻鳳城西\*。吟情孤迥成無奈，容易街燈照晚齊。

十九年十一月同應啓无之約，去天津河北女子師範學院。蒙院長齊君招飲，於逃席中乞得少間。歸北京後，成詩六絕。吟玩累日，求其詞足遣懷，而此境悠邈。自嗟，昔年學爲匠既不成，今日學爲文匠亦爾。煨藥翁想同此歎息也。 衡寫稿。 「平/伯」印

俞平伯（1900-1990）は北京大学での周作人の学生であり、詩人・散文作家、また紅樓夢研究者として名高い。周作人と同じく、俞平伯も 1937 年以降日本占領下の北平に留まった。

『俞平伯旧体詩鈔』（成都：四川人民出版社，1989）363-364 頁は、「天津雜詩（録三首）」として第三、五、六首の三首のみ収録する。跋文はない。『俞平伯全集』第 1 卷（石家莊：花山文芸出版社，1997）406-407 頁も同様。

【校異】『俞平伯旧体詩鈔』および『俞平伯全集』は（ ）内の字に作る。

第三首：第一句「度彩虹」（廣陌通），第二句「大沽河水」（沽河水色），第三句「景」（影），第四句「輕」（單）。

第五首：第一句「到」（過），第三句「欲暝」（到晚），第四句「獨」（惟）。

第六首：第一句「巢痕」（歸寧），「子」（壘），第二句「阻」（隔）。\*「時方遷居清華園校

舎」との注あり。

【跋文の大意】

民国 19 年 11 月、(周先生と)ともに沈啓无の招聘に応じて、天津の河北女子師範学院へ行く。齊院長より酒宴に招待されたが、宴会を途中で抜け出し、少しの時間を得るようお願いした(その間、天津市内を遊覧した)。北京に帰ってから、絶句 6 首を作った。吟味すること数日、感慨を述べるに足る詞句を求めるが、その詩境ははるかに遠い。自ら嘆く、昔年の(章太炎先生がおっしゃった)学んで「匠」(真理を究めて天地に広める学者)になるということはとうにかなわず、最近の学んで「文匠」(文章の書ける人)になるということもまたかなわない。きっと周作人先生も私と同じように嘆いておられることでしょう。衡(兪平伯の本名は兪銘衡)記す。「平/伯」印

【注】「學爲匠」：章太炎「與王鶴鳴書」に「古之學者，學爲君也；今之學者，學爲匠也。爲君者，南面之術，觀世文質而已矣；爲匠者，必有規矩繩墨，模形惟肖，審諦如帝，用彌天地，而不求是，則絶之。」とある(『章太炎全集』四，上海：上海人民出版社，1985，151頁)。古くは『論語』憲問に、「子曰，古之學者爲己，今之學者爲人。」とある。

3. 兪平伯「送玄公赴欧州二首」(図 6)

翰海停車挹晚涼，烏拉嶺外有斜陽。少將遠志酬中歲，多作佳游在異鄉。三月花都春爛漫，十年霧國事微茫。槐陰時霎燈前雨，明日與君天一方。

下城鬢舍乍披襟，去矣年光不可尋。眼底桑田同閱歷，尊前哀樂半銷沉。壯君絕域河山氣，媿我荒居癩病心。欲賦楚聲代驪唱，山中松桂未成陰。「平/伯」印

『兪平伯旧体詩鈔』365 頁、および『兪平伯全集』第 1 卷，408 頁は、「送朱佩弦兄遊欧州(二首)」という題名で収録する。朱自清、字は佩弦。1931 年 8 月 22 日に朱自清が欧州留学へ出発するのを送る詩。『兪平伯全集』第 3 巻の口絵に、同詩の兪平伯 1974 年手迹を掲載する。

【校異】『兪平伯旧体詩鈔』および『兪平伯全集』は( )内の字に作る。

第一首：第三句「少」(稍)，第五句「三」(五)，「爛漫」(『旧体詩鈔』は爛漫，『全集』は爛熳)

第二首：第三句「桑田」(滄桑)，第五句「河山」(關河)，第七句「賦」(寫)。\*「春在堂句」との注あり。

本便箋の地には「齊永明六年太歲/戊辰於吳郡敬造/維衛尊佛」なる文が三行に分けて刷り

込まれるとともに、左隅には「中華民國二十年一月煨藥廬■箋」（■は判読できず）とも見える<sup>16</sup>。「齊永明～」は会稽・妙相寺の石仏の銘文である。「煨（煨）藥廬」は周作人の書齋名。周作人は兪平伯宛の手紙で「印了這麼一種信紙，奉送一匣，乞察收。此像在會稽妙相寺，為南朝少見的石像之一，又曾手拓其銘，故制此以存紀念，亦並略有鄉曲之見焉，可一笑。（このような便箋を刷ったので、一箱お送りします。ご査収下さい。この像は会稽の妙相寺にあり、南朝の数少ない石像の一つです。以前、その銘文の拓本をとったので、これを作って記念としました。いささか故郷自慢の嫌いがありますがご一笑下さい。）」（民国19年11月21日）と記している<sup>17</sup>。ただし、この手紙の日付は本便箋の「民國二十年」とあわない。この碑文を使った便箋には民国19年版と、本便箋の民国20年版があり<sup>18</sup>、兪平伯宛の手紙は前者を贈った際のものである。おそらく周作人は両版ともに兪平伯に贈ったのであろう<sup>19</sup>。兪平伯はその便箋に自らの詩を記して返し、それが濱一衛のもとに渡ったこととなる。

#### 4. 錢玄同致周作人書簡（図7）

名齋再白專齋。足下用中村氏筆，初始作書，固甚苦艱澁。此信即其鍊證也。但弟敢信，用之純熟以後，必有得心應手之快感，此可斷言者。彼時若偽作漢晉書影，私謂必勝于某君之陶詩卷子也。錢玄同又白。 「疑/古」印

錢玄同（1887～1939）は、日本留学時代の1908年、ともに章太炎の講筵に侍って以来、周作人と親友であった。新文化運動、国語運動で中心人物となり北京大学教授を務める。錢玄同も日本占領下の北平に残り、周作人と往來を続けていたが、1939年1月17日に急逝した。

『錢玄同文集』（北京：中国人民大学出版社，1999）に未収録。中村不折（1866～1943）が収集に尽力した北派の書体で書かれたこの書簡は、日中書道交流史上、高い価値を有する。王羲之を初めとする南朝書体が伝統的に重んじられてきたが、阮元の「南北書派論」「北碑南帖論」以来、清末から民国にかけて北朝の書体が評価され始めていた。周作人や錢玄

<sup>16</sup> 「永明砖拓入新箋」（『文匯報』2016年5月7日，第8版 [http://wenhui.news365.com.cn/html/2016-05/07/content\\_417394.html](http://wenhui.news365.com.cn/html/2016-05/07/content_417394.html)）によれば、■は「制」か。

<sup>17</sup> 『周作人書信』（香港：實用書局，1967）184頁。いま止庵校訂『周作人自編文集：周作人書信』（石家莊：河北教育出版社，2002）95頁。

<sup>18</sup> 前掲「永明砖拓入新箋」参照。

<sup>19</sup> なお、兪平伯も民国20年（1931）2月8日に、周作人に便箋を贈られたことに感謝する手紙を送っている。（『兪平伯全集』9，石家莊：花山文艺出版社，1997，226頁）日付上は「民國二十年一月」以降となるが、これがどちらの便箋に対する感謝かは断言できない。

同らは中村不折『禹域出土墨宝書法源流考』（東京：西東書房，1927）を見て、北朝の墨跡に刺激を受けた可能性がある。中村不折の収集した真蹟、石経、墓誌、拓本等約 16000 点は現在、台東区立書道博物館の所蔵。

【大意】

名齋（不詳、錢玄同の書齋名か）より専齋（周作人の書齋名）に再呈申し上げます。初めて中村不折の書体で書を作りました。大変に苦労しました。この書簡がその証拠です。しかし私が思うには、この書体に熟練した後には、きっと思いのままに筆をあやつる快感を得られるであろうと断言できます。そのときにもし漢晋の書影を偽作すれば、きっと某君の陶詩卷子にまさることでしょう。錢玄同再呈。「疑/古」印

（付記）以上紹介した、周作人より濱一衛に贈られた書 4 点は、所有者の藤本康子様より九州大学附属図書館へ寄贈されることとなった。2018 年 2 月 6 日に九州大学伊都キャンパス新中央図書館で開催される、第 1 回「東アジアの交流と文学」国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流——周作人、冰心、濱一衛」で初めて公開される予定である。

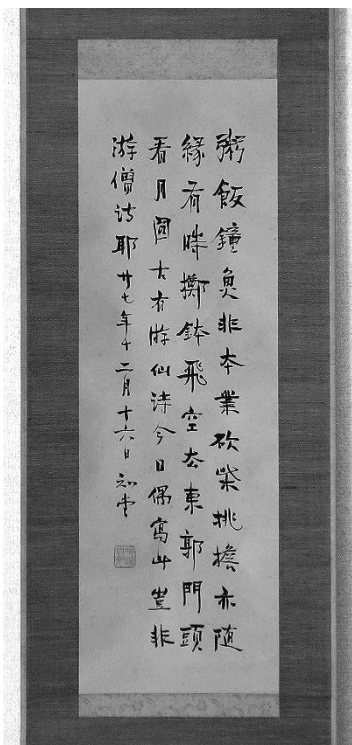


図 4 周作人「苦茶庵打油詩」  
其三（擲鉢詩）

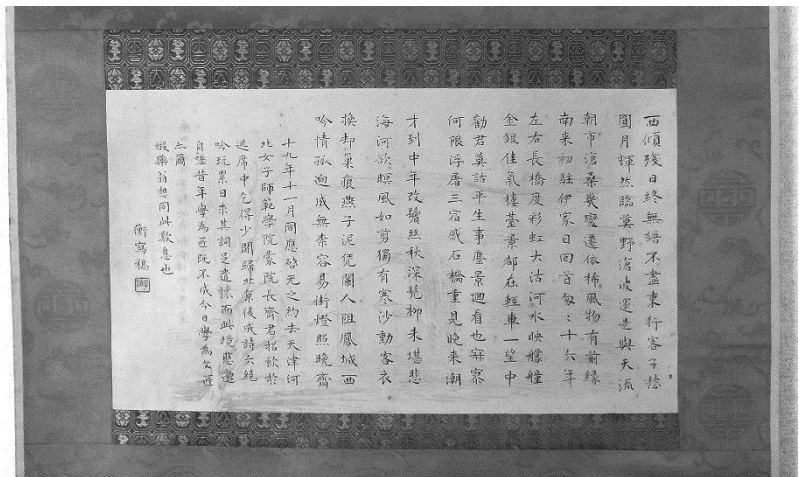


図 5 俞平伯「天津雜詩六首 附跋文」

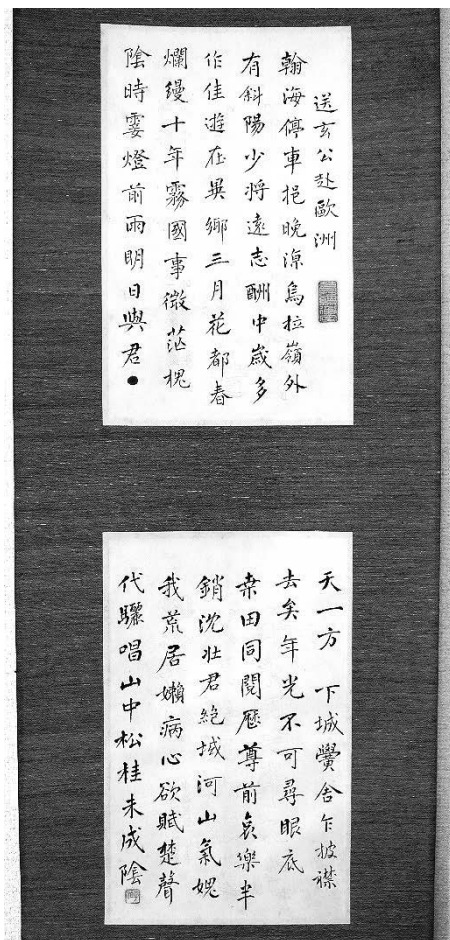


図6 俞平伯「送玄公赴歐洲二首」

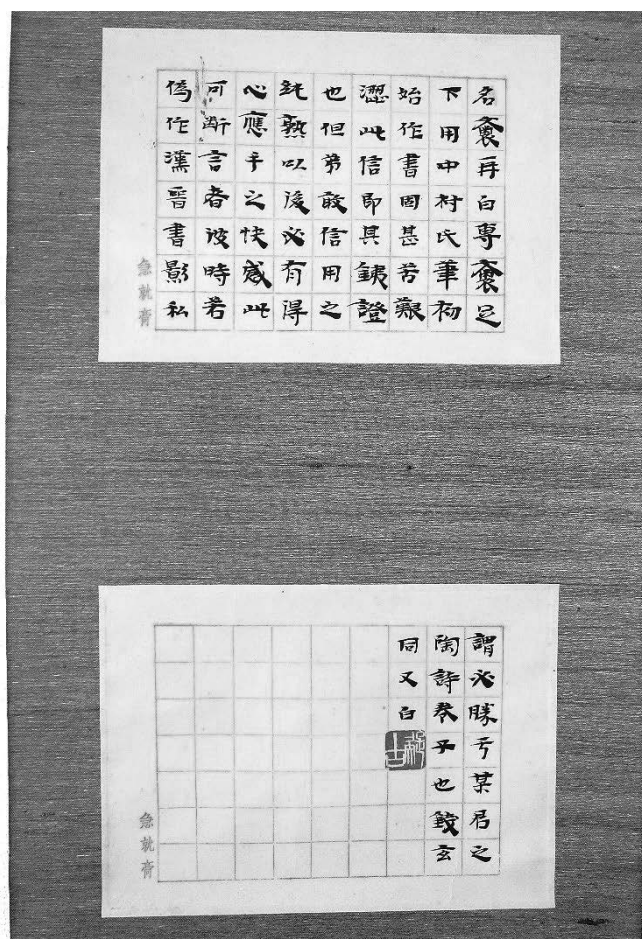


図7 錢玄同致周作人書簡

本研究は科研費（16H03405）の助成を受けた。

（本稿は、『言語文化論究』第40号，2018年に掲載したものを転載した。）